

アジアの石油・ガス市場の将来 : AOGC 2013

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

6 月 9～11 日、マレーシア・クアラルンプールにおいて、Asia Oil and Gas Conference (AOGC) 2013 が開催された。AOGC は第 1 回が 1996 年に始まり今回は第 17 回、会議表題が示す通り、アジアの石油・ガス市場に関わる諸問題を議論する国際会議である。会議の主催者は、マレーシア国営石油会社 Petronas であり、主催者発表によれば、今回の会議には 30 カ国から約 1200 名の参加者が集まる大規模な会議となった。会議の冒頭、Opening Ceremony では、マレーシア首相であるナジブ・ラザク氏が基調講演を行うなど、主催国マレーシアとして本会議を極めて重視し力を入れていることが種々の点から実感された。

会議においては、石油・ガス産業を巡る現状、経済・政治に関する将来シナリオ、アジアのエネルギーセキュリティ、米国シェール革命の状況とアジアへの影響、石油及びガス市場の上流・中流・下流に関する現状と展望、など、まさにアジアの石油・ガス問題に焦点を当てたプレゼンテーションと議論が展開された。以下では、筆者にとって特に印象に残った、アジアの石油・ガス問題を巡る論点を整理してみたい。

まず、第 1 に全体感として、今後の石油・ガス需要の拡大と輸入量・依存度の増大に伴って、アジアの石油・ガス市場が世界全体にとって重要性をますます拡大していくとの共通認識に基盤を置いた議論が展開された点がある。また、アジア域内における有力な産油国。産ガス国・LNG 輸出国としての顔を持つマレーシアにとって、アジア市場の重要性を強く意識した議論が行われた、といっても良い。この、アジアの重要性認識と共に、アジア市場の内外を巡る様々な課題や不確実性に関する問題が、マレーシアを始め全ての関係者の重要な関心事項となっている、という点も強く印象に残った。

例えば、筆者も参加した、アジアのエネルギーセキュリティに関するセッションでは、輸入依存が拡大するアジアのエネルギー問題に関連して、特に日本のエネルギー・環境政策の将来に関する関心が示される一方、そのアジアと相互依存関係を高める中東における様々な不安定要因・問題の存在に関する議論が行われた。特に、このセッションでは、イランとイラクの両国に焦点を当てた議論が行われ、イラン大統領選の帰趨とそのイラン及び湾岸地域への地政学的な影響、今後のイラク国内の安定と発展を巡る諸課題、クルド地域とイラク中央政府の関係と今後の石油開発への影響等に関する興味深い議論が行われた。また、中東地域全体で急速に拡大するエネルギー需要への対応が極めて重要な課題となりつつある中、まさにその点がアジアとの相互依存関係強化の新たな架け橋・要素となる可

能性が現れている点などに関する議論が展開された。

第 2 には、アジア市場を取り巻く環境として、あるいはアジアと中東との相互関係に影響する要素として、米国シェール革命の動向とその影響に高い関心が示されたことを指摘したい。会議の第 2 セッションはまさにそのテーマに焦点を当てた議論が行われ、その他のセッションの中でもシェール革命に関連したプレゼンテーションや議論が多数展開された。このことは、今やアジアの石油・ガス市場の将来を考える上で米国シェール革命が最大の要因として位置づけられていることを示す「証左」であるともいえる。会議の議論の中では、2020 年頃には米国が世界有数の LNG 輸出国となっている可能性が浮上していること、シェールオイルの生産に関しても従来の予想を超えて大幅な増産が続く可能性があること、等が指摘され、大きな関心を集めた。その中で、特にマレーシアを始め、米国以外のアジア市場向けの既存の石油・ガス輸出国が、シェール革命がもたらしている大きな影響・インパクトを強く意識せざるを得なくなっている状況を垣間見ることができた。

第 3 には、上記の点と関連して、特に関心を集める米国からの LNG 輸出や、同じく 2020 年以降長期的には世界有数の LNG 輸出国となる可能性があるモザンビークの LNG 計画による影響も含め、アジアの LNG 市場の将来への高い関心が示された点を見逃すことはできない。今回の会議のスピーカー・パネリストの大多数が、産ガス国関係者や供給側プレイヤーであったことから、米国 LNG 輸出による影響を過大に見積もる（期待する）ことへの牽制や警戒感を示す見解が多く示されたことが本会議の特徴であったと言える。また、将来のアジア LNG 市場について、買手が期待するような「買手市場」の到来が実現するのかどうか、「Cheap LNG」といったものが本当に存在しうるのか、といった点についても、懐疑論も含めた興味深い議論が示され、供給者側にとっては本問題が将来への大きな課題・懸念となっていることを実感した。同時に、買手にとっての Security of Supply だけでなく、売手にとっての Security of Demand の重要性を今後も十分に検討していくことが必要である点も改めて認識することになった。

第 4 に、石油の問題について、(そしてガス・LNG 問題にも重要な意味を持つ点として)、今後の国際石油市場のマクロ的なバランスとして、タイトオイルを始めとする非在来型石油の増産が持続する中で需給緩和圧力が発生しつつある点を指摘する声が多々聴かれた点も興味深かった。今後少なくとも中期的には、どこかのタイミングで原油価格への下方圧力が発生し石油情勢が変化していく可能性があること、同時に原油価格の下落はアジアの LNG 市場を巡る価格形成問題や新規プロジェクト動向にも多大な影響を及ぼすことが予想される。それだけに、今後の石油市場の展開、その中でシェール革命の影響に注目していく必要がある。その他にも、重質・軽質原油毎のフローの変化、米国の精製業と製品輸出の状況とそのアジアへの影響、米国の石油化学産業とアジア市場への影響など、アジアの将来を展望する上で見逃すことのできない点が多い。国際市場で重要性を増すアジアの石油・ガス市場の将来を巡っては、新規のプレイヤーだけでなく、現在の市場で重要な役割を果たすアジア域内の産油・産ガス国や既存プレイヤーの立場・見解・戦略動向にも十分な留意と考慮を払っていくことが肝要である。

以上

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp